

Newsletter

June 2023

<http://www.aack.info>

目次

追悼 並河 治さん (2022年12月3日逝去)	ボケさんと碁
父の尻尾	古瀬駿介17
酒井 芽1	追悼 並河ボケさん 碁碁と雲南懇話会の思い出
並河ネボケさんを偲ぶ	前田栄三18
斎藤惇生3	並河治さんの死を悼み、ついでに家内を追悼します！
ビヴァークを強いられた落第登山の記憶	佐々木隆造20
酒井敏明6	ボケさんの思い出、そしてボケさんからのメッセージ
ボケさんはボケてはいないー学生時代の思い出	山岸久雄21
谷 泰8	探検の世界へのお導きをありがとうございました
並河ボケさんのこと	稲葉 香22
松井敦男11	追悼特集世話人からの感謝と御礼
貴族としてのボケさん	谷口 朗23
岩坪五郎11	上高地の JAC 山研へどうぞ
並河治先輩・ボケさんを偲んで	斎藤清明24
松浦祥次郎12	堀 了平さん追悼文寄稿のお願い25
「並河 治」先輩の御霊に捧ぐ	会員動向25
藤本栄之助13	事務局だより25
ボケさん、ありがとう	編集後記26
脇野征一14	
“Guten Kameraden”	
伊藤寿男15	
並河さんへの手紙ー追悼文に代えてー	
阪本公一16	

追悼 並河 治さん (2022年12月3日逝去)

父の尻尾

酒井 芽

私の名前は「芽」と書いて「めぐむ」と読む。園芸の技術者である父が名付けたらしい。ただ、生まれてこの方、同じ名前の人に出会ったことがない。おまけに、正しく名前を読んでもくれる

人にも出会ったことがない。誇らしく、少し厄介な名前である。

私と父との付き合いは58年。まあまあ長いですが、母やAACKの皆さんよりは短い。父は、

異世界から来たような、つかみどころのない人だった。娘や孫に良いことがあってもストレートに喜びを表さず、その場からいつの間にかいなくなっている。実家の家族関係がドライだったからか、父はとても素っ気ないのだ。よって、今回 AACK で追悼特集をしていただけるのは、本当にありがたい。こうやって家族として原稿を書きながらも、父の本性をつかみきれずにいるのだから。

父はいつも泥まみれの格好をしていて、坂の上に住んでいたのに車もなく、質素に暮らしていた。ただ、家の前を常に花であふれさせていたため、近所では有名な家だった。夕方になるとお酒をチビチビ飲みながら、テレビの前に足を組んで座り、サスペンスドラマや大相撲を見ていた。

それでも父はなんとなくすごい人であり、父の友人たちは立派で、また祖父や曾祖父も名士だった。東京から遠い、ごく普通の家だったが、友人や若い人たち、外国の方がよく遊びに来た。父はカレーや鶏の丸焼き、ローストビーフで皆をもてなした。鹿肉やすっぽんを調達してきたり、鶏をしめて食べさせてくれたこともある。ただ私には、鶏の味よりも必死の鳴き声の方が忘れられない。

そんな父はいつも汚いジャンパーを着ていたが、ここぞというときにはおシャレをして、花やチョコレートを人に贈った。形式的なことを嫌うのに、私が仲人さんを立てた時も、気持ちよく挨拶に出かけてくれた。運動会や授業参観には来るはずもないが、私が高校生の時に三者面談に来てくれたことがある。担任の前で成績の悪い私のために頭を下げ、私に褒めるところがないので、やたらと「みやさんは美人だなあ」と私の友人を褒めていた。

ノーベル賞候補の方の植物を預かっていたことがある。受賞が決まった後、父は「忙しいだろうから」と自分から連絡することはなかった。数ヶ月後にその方から連絡があった。「並河さんはお加減悪いのでしょうか。受賞したら皆さんが連絡くれたのに。」

結婚して実家を離れてから、私は父の原稿のパソコン入力を請け負っていた。故に、父の文章のクセを知っている。また16年前に夫の転

勤で大阪に越してから、父の姉たちと付き合いようになった。そこで、子どもの頃の父の姿を知ることになる。

6人きょうだいの5番目。男3人の真ん中。ひねくれる素質十分である。「治ちゃんは出来が悪くてねえ、可哀そうな子だったわ」などと言われている。今も、顔と話し方が瓜二つの伯母の口から、父の悪口が出てくる。あの世で父は苦笑いしているだろうか。私は父の尻尾をつかんだ気になっている。娘に弱みを握られた父は、居心地が悪いだろう。

父にとって、関西はやはり大切な故郷である。AACKの集まりや、実家の用事でときどき関西に来ていた。牛の柄の赤い帽子をかぶり、面白Tシャツを着て、新幹線に乗ってくる。素っ気なくせに人の気を引きたくて、相手が困った顔をしたり笑ったりすると、子どものように嬉しそうにしている。

入院する2ヶ月前にも、山岳部の集まりのついでに私の住む高槻に顔を出した。京大農場の跡地が安満遺跡公園という広い公園になっていて、二人で訪れた。農場の建物が残っていて、「ここに教授がいて」「ここに座って」と説明してくれた。でも「きれいになりすぎたな」と文句も言っていた。建物をバックに写真を撮った。元気の父の最後の写真だ。

その後、京都駅へ行き、伊勢丹でうなぎを食べた。母が蛇のようで気持ち悪いとうなぎを嫌うため、家でうなぎを見ることはない。母に内緒だったから、うなぎは余計に美味しかった。「うまいな」「美味しいね」とニコニコしながら食べた。それが父と二人でゆっくりしゃべった最後の時間だった。

父は去年の2月に突然、手足が麻痺して全く動かせなくなった。加齢や姿勢が原因の、脊椎の変形による脊髄損傷。思い当たるフシばかりである。重い荷物を背負って山に登っていたし、毎年地面に座り込んで、パンジーの苗を2千鉢も作っていた。3月にはリハビリ病院に入院し、電動車いすに乗るのを目標にリハビリを頑張っていた。9月に介護老人保健施設に移り、引き続きリハビリをしていたが、大きな改善は見られなかった。11月半ばからむくみがひどくなった上に、コロナ禍で面会もできずストレスがた

まっていたようだ。治療が必要だったが検査すら拒否。食事も拒否。病院との板挟みの姉に、大なる迷惑をかける。急速に状態が悪くなり、救急病院に搬送。ところが転院時の検査で新型コロナへの感染が判明。家族は防護服を着て会うことになり、その2日後の12月3日、多臓器不全（腎臓・肝臓の悪化）により亡くなった。

コロナのため、家族が火葬場へ行くこともできず、病院でのお別れとなった。結果、葬儀も骨葬になった。遺体を人に見せなかったのも、父らしい。きっと弱った姿を人に見せず、スッと消えてしまいたかったのだろう。

あと1ヶ月で90歳だった父は、十分長生きしたと思っている。不自由な身体で9ヶ月間よく頑張ったね。テレビも見ず新聞も読まず病室でずっと考えこんでいたようだ。9ヶ月間考えた末の最期なんだろう。私たちもそれを尊重することにした。

死後、葬儀に関して父の希望を書いた紙が見つかったので、できる限りそれになった。無宗教で平服、香典不要。ロビーに父の遺品や写真を飾った。たくさんの花に囲まれ、多くの友人たちが見送ってくれた。スピーチやAACKの皆さんの歌。最後に父の書いた遺書（お別れの挨拶）を姉が代読した。

父の遺書には、友人たちや母への敬意や感謝の言葉がつつられ、人類とすべての動植物の共生を望み、締めくくられていた。娘や孫たちへのお別れの言葉はなかったけれど（照れくさかったと解釈することにして）、あなたの血を

受け継いだ者たちで、その思いをつないでいこう。

最後になりますが、谷口さんはじめ、AACKの皆さま、山岳部後輩の山近記念総合病院の佐藤先生、また父と関わったすべての方々に、父に成り代わり、御礼申し上げます。面白く幸せな人生だったと思います。本当にありがとうございました。きっと今頃、細い目を輝かせながら、新たな冒険を楽しんでいることでしょう。



安満遺跡公園（京大農場の跡地）にて

並河ネボケさんを偲ぶ

斎藤惇生

はじめに

昨年12月5日、並河ボケさんの訃報がメールに入った。2022年2月四肢麻痺の発症から入院治療、その後リハビリテーション、老健施設への入所と経過を大体知っていたので、急に合併症があったのかと驚いた。あとで娘の品田さんのメールを見て経緯が了解できた。このことは後述する。2019年6月高村泰雄（デルファー）が亡くなってから京大山岳部で心身を磨いた者の訃報がボケさんで10人を超した。

みな後期高齢者なので、あり得ることだが、ピッチが少し早くなった。もうこれ以上早くならないことを祈っている。

ボケさんの仇名の由来

これから後も並河ボケさんを、みなが親しみをこめて云うように、ボケさんと書くのだが、もう仇名の由来を知っている者は少ないと思う。まず先に由来を説明する。ボケさんは1951年入部である。新入者を集めての会の後

で、みな印象は「並河と云うのはネトボケした顔しているな。山岳部もつやらか」であった。戦後新しく組織された山岳部の第1回の夏山合宿は剣で、きびしい林一彦先輩の指導を受けた。翌1951年は穂高だった。指導者は屏風岩の初登攀者として名高い伊藤洋平先輩だった。前年と違って梅雨明けしていなかった。雨のなか上高地を出発した。先発隊に並河がいた。滑り易いから用心しろと云われていた横尾の橋を渡る時、並河は見事に滑って梓川に漬かってしまった。しかしなんら動ずる様子もなく助けられて上がった。顔も相変わらずネトボケたようなままだったそうだ。

雨は止まず涸沢に張ったテントの中を水が流れていた。焚火の火がつかず食当の菊池（クメロー）は絶望的な顔になった。みなで助け、やっと火が付き飯盒飯がたけた。小雨の間に穂高小屋まで行った。小屋主の重兵衛さんに何時雨は止むだろうかと尋ねた。重兵衛さんは「止まない雨はねえ、だよ」と答えた。それもそうだなと感心して涸沢に戻った。梅雨がやっと明け、2日ほど伊藤さんに穂高全体の話聞き、稜線を歩いただけだった。

帰ってから並河が梓川に落ちたことが話題になった。「落ちてはなにも騒がず相変わらずネトボケタ顔だった」と一緒に行動し見ていた者が云う。仇名はネボケにしようとするが、決まらなかった。上級生はオイ！ネボケと呼んだ。下級生が入り、最初ネボケさんで、だんだん云い易いのでボケさんになった。ネボケよりボケのほうが程度は悪いのだが、本人も納得していたようでボケさんが定着した。

ボケさんの病気と死

ボケさんの四肢麻痺は頸椎が迂り、脊髄を圧迫したのが原因になっている。意識は問題なく、会話もお得意の冗談を看護師に云えるぐらいだった。しかし頸椎の迂りによる四肢麻痺は外傷による以外きわめて稀である。私は病状を聞き、診断を聞き、ボケさんは回復不能と思った。病気発生以来、多数の後輩たちの心配、入院先の世話援助などの努力を知ることができた。後輩たちにこれほどしたわれていたとはボケさんの持ち前の徳によるのだが、幸福な人だったと思う。

だが脊髄疾患による四肢麻痺のほうは、6ヶ

月という毎日のリハビリにも、上肢が少し動く程度だった。6ヶ月過ぎると病院から老健施設などに転院し、リハビリも週2日になってしまう。これは医療費節減のため厚労省が医療界、患者団体の猛反対を押しきって決めたのである。たしかに6ヶ月もリハビリしてあまり回復しないものはほとんど回復しないのは事実である。

ボケさんは老健施設へ転院した。11月中旬ごろより腎機能が悪化し尿量が減ってきた。治療をすすめたが本人は拒否、そして食事をとらなくなった。近くの病院を受診したが本人治療拒否のため何もできず戻った。点滴はしていたようだが12月3日息をひきとった。

私は品田さんのメールを見て、伝えられている漢の高祖の最期を思い出した。高祖劉邦は楚の項羽と戦い続け、最後垓下の戦いに勝利して漢王朝を樹立した。彼の最後の病状が悪化した時、臣下が「いかがいたしましょう」と問うた。漢代には疾患治療に草根木皮を個別に使うだけでなく、各々の薬効を基に合剤が体系化されていた。現在でも東洋医学の基礎となっている「傷寒論」は漢代に発刊されている。しかし高祖は手を振って「命はすなわち天にあり」と云って更に手をつくすことを拒否して死に赴いたと云われている。

ボケさんも四肢麻痺が目立った改善もなく、合併症も加わったことで天命を自覚したのではないかと思う。近時高齢者が増え、死に方が難しくなっているのが現状である。ボケさんの最後の心境態度は見事だったと感じている。

呉下の阿蒙だったボケさん

魏、呉、蜀の三国時代、呉の孫権の部下に呂蒙という将軍がいた。戦上手であったが、家が貧しかったので学問はしていなかった。孫権から本を読むように云われた。呂蒙は熱心に本を読み学識を高めた。久しく会ってなかった旧友の魯肅が尋ねてきた。話しているうち魯肅は呂蒙が学識があつて英明になっているのを知った。魯肅は呂蒙の背を打って云った。あなたは戦好きだけだった昔と違い、今は学識も広く英明になっている。昔の阿蒙（蒙ちゃん）ではないね。呂蒙は答えた。士は別れて三日なれば即ち更に刮目して相待と云った（刮目は目をこする意味）。

私がボケさんを呉下の阿蒙と思ったのは、以下のような次第からである。彼は農学部農学科だったが何を専攻しているか知らなかった。山に入っても特に花に興味を示すこともなかったように思う。大学院の時、一度だけ高槻農場に呼ばれた。まだ日本で栽培されていないブロッコリーを食べさせてくれた。ボケさんはこれはきっと日本で受け入れられるだろうと云った。私はボケさんは野菜の研究をしているのだと思っていた。

大船のフラワーガーデンに脇坂と一緒に就職してから縁が遠くなった。5年ほど前だが笹谷のべべちゃんが、ボケさんが研究開発した花が切手になっていると買ってきてくれた。大船のフラワーセンター開園50周年の記念切手だった。10枚の切手のなかに芳子と名のついたピンク色の見事なしゃくなげの花がボケさんの開発と知って、後世に残るいい仕事したなど感心した。そのころからボケさんは花の名前を良く知っていてヒマラヤで撮った花の写真を見てすぐ名前を云ったとこのことを聞いている。

ボケさんは1958年川喜田二郎隊長の率いる西北ネパール学術探検隊に参加した。行く前に聞いたのだが、「西北ネパールにはボン教徒がいるので面白そうだから参加する」だった。花や植物の研究をするつもりは無かったようだ。鳥葬を見た隊で有名になったが、ボケさんが何をしたかほとんど知らなかった。ニューズレターNo.51の川喜田二郎追悼号に川喜田さんを偲んで「ボケのたわごと」の題で寄稿している。西北ネパールを十分楽しみ探求したようだ。ボン教徒に出会ったかは知らない。

メールを見るとボケさんは料理にこっていて、わざわざホテルのレストランのようにメニューを書いて自作の料理で後輩を接待した。現役時代ボケさんが食料係は多分一度もしたことがなかった。あまり食べ物に関心があるようではなかった。このことも私にとって驚きだった。一度でよいから食べてみたかった。多くいろいろあるが、魯肅が呂蒙をほめたようにボケさんの肩を叩いてほめてやりたかったのだが、もうできなくなった。

ボケさんの特異能力、酒と蛇

ボケさんが大変な酒豪であったことはみな知っている。どれだけ飲んでもまず酔わない。

様子も変わりなかった。現役の時に日米安全保障条約（安保）反対運動のデモが盛んだった。どう打合せしたか忘れたがボケさん、土倉九三さんと私の3人がデモに参加しようと大学を出た。途中の酒屋に2人はしめしあわせたように立寄り、コップ一杯の焼酎を水を飲むように飲んだ。そのまま平気な顔でワッシュイをやっていた。土倉さんが酒飲みであることは知っていたがボケさんも劣らぬ酒豪であることを初めて知った。

毎年送った賀状にはいつも大酒はするなどと書いた。アルコールは胃腸で吸収され肝臓で代謝される。まずアセトアルデヒドとなり次いでアセトアルデヒド脱水素酵素（ALDH）によって酢酸になり、酢酸は筋肉などの肝以外の組織でCO₂と水に代謝される。ALDHのうちALDH2と呼ばれる酵素に活性がゼロか弱い欠損型がありアルデヒド分解能力を欠く。酒がまったく飲めないかすぐ酔う。ALDH欠損型は渡来人によって（弥生人に含まれる）もたらされた。縄文人には欠損型は無かった。ボケさんの酒豪ぶりは多分縄文人の遺伝子を受けついでいたのだろう。ボケさんの風貌は縄文人的なのかも知れない。

もう一つは蛇である。たしか金毘羅の合宿の時だったと思う。帰路途中で蛇がいた。ボケさんはすっと近寄り素手で捕まえた。そして全然蛇は恐くないと云って首に巻きつけた。ヤマカガシだったと思う。蛇はびっくりして逃げるかと思ったがボケさんの首に巻かれたままじっとしていた。人間の体温が変温動物(?)の蛇には気持ちが良いのだろう。これにはみな仰天した。人類は森林生活の時、蛇による被害が多かったので本能的に蛇を嫌悪するようになったと聞いたことがある。

夕食の時、豚汁に蛇を入れて煮て、闇鍋にしようとなった。ボケさんが蛇をいくつか輪切りにして豚汁に入れた。誰に入っているかわからない。私の腕に丁度肋骨のところが入っていた。骨が多いのですぐ分かった。肋骨の中は肺と心臓だ。さすがにしゃぶるのは止めて背中のみだけ食べた。もしボケさんの蛇好きが高じて蛇研究者になっていたら、ずいぶん変わった人生になっていたに違いない。

私は囲碁をしないので知らないが、ボケさん

は人に教えるほど強かったそうだ。

ボケさんの祖父、新吾様のこと

現役の時二回ほどボケさんの家へ遊びに行ったことがある。一度父上が出てこれられ、話に加わられた。北海道の粉雪のなかを滑るとたいへん滑り易く楽しかったと、身振を混ぜて話された。最後に私が熊本出身と知って、次のように云われた。「私の父は鳥取藩の武士だったが、陸軍に入り西南戦争の時熊本城の籠城軍にいた。北方にきている政府軍の部隊に戦況、城内の状況を報告するため密使を派遣することになり、谷村計介伍長と並河（なびかと鳥取では云っていた）伍長が選ばれた。司令長官の谷干城少将は『密使は農夫などに身を隠す必要がある。並河伍長は一見、学がありそうな感じがある。』として、谷村伍長に決まったそうだ」と話された。

私たち熊本人は明治10年の西南戦争を、近時に起った大きな歴史的事実と認識している。英雄・西郷隆盛が率いる日本最強と云われた薩摩軍団2万人による3回の総攻撃と、籠城52日に堪え、4000名で守る加藤清正築城の熊本城は陥落しなかったのである。しかし私が西南戦争で覚えている人名は西郷隆盛、熊本城司令官・谷干城（当時37歳土佐藩出身）と、密使になった谷村計介の3人だけだった。谷の銅像は城内に、谷村のは城内に向かう道端にあった。谷村の経歴写真が国会図書館にある。写真を見ると意志強固朴訥な顔である。薩摩藩の下級武士出身だが無学ではなかった。たいへん質朴な様相を谷司令官は評価したのだろう。

彼は2月26日に命を受け城を脱出し、ボロ

ボロな着物を着た農夫に化けて北上した。途中2回薩軍に捕らえられたが、なんとかきり抜け3月2日、城より約30km北の高瀬に来ていた政府軍旅団に着物の襟に縫込んだ密書を渡し、城内の状況、薩軍状況を報告した。彼は命を受けたのか自発か、休む間もなくすぐ南方で始まった田原坂の戦に赴き、3月4日に戦死した。この彼の行動は小学校の教科書に「ちゅうくんあいこく」の題で昭和7年まで載っていた。「伍長・谷村計介は・・・」と云う歌い出しの唱歌もあった。

2019年、私はふと思い出してボケさんに電話して祖父上のことを聞いてみた。しばらくして、次のような調べたことが書いてある手紙が来た。並河新吾は安政元年生れ。西南の役で籠城していた。当時は23歳で階級は伍長。陸軍に入る前は因幡藩の藩士で鳥取に住んでいた。晩年は京都で一緒に住んだが、昭和13年に死亡。うろ覚えだが、籠城末期には食糧も尽き、城中のネズミ、虫、鳥、蛇を食ったが、鳥は臭くて不味く、食えなかったそうだ。戦後、祖父上は北海道開拓の屯田兵の募集係となり、自分自身も屯田兵となって岩見沢、旭川、江別で開拓をやり、その後札幌に住み、札幌第一中学の配属将校をしたとのことだった。熊本籠城では谷村とともに密使候補だったことは書いていなかった。密使のことは、父上が祖父上から聞かれた全くの秘話だったようだ。

もし新吾様が密使に選ばれていたら、密使の成功失敗、戦死などあり、並河家の運命は大きく変わっていただろう。ボケさんがこの世に現れていないことも考えられるのである。

ビヴァークを強いられた落第登山の記憶

酒井敏明

並河治さんは私が京大山岳部に入ったとき1学年上の先輩部員の一人でした。普通に並河さんと呼ばれることはめったになくて、通称はネボケまたはボケサンであった。ご本人から中学か高校ではヘカジと呼ばれたと聞いたことがある。本名の漢字を無理に音読みにしたものだと説明されたが、KUACでは通称以外の呼び名はもちいられなかった。

同じく1年上の先輩川瀬裕史さんはマタサ

ブローまたはマタサブのあだ名を頂戴していたが、呼びかける相手によりこのあだ名がつねにつかわれたわけではないが、並河さんは100%ちかくボケサンで、ご本人はこれを抵抗なくうけいれていた。このお二人は京都府立山城高校卒業生と承知していたが、敗戦後中国青島（チンタオ）市からの引揚家族の一員である私自身は、1946年4月に山城高校前身の府立第三中学校に1年次生として編入学を許された身であ

り、3年生の2学期(1948年秋)に新しく制定された教育制度によって新制高校が発足した際に、通学区域にできた府立鴨沂高校併設中学3年生に転校したのです。並河・川瀬両先輩が京大に入学、山岳部に入部した次の1952年3月に私は鴨沂高校を卒業、4月に京大入学、そして山岳部に入部した。京三中に通学した2年半の間、のちに先輩になった三中生2人が同じ学び舎で1年上級生として在学していた偶然を、のちになって知ることになった。不思議なご縁というべきでしょう。川瀬マタサブは就職した会社の都合で滞米生活がながく、2021年かの地でおなくなりになったのですが、並河ボケサンまでマタサブのあとを追うようにして異界の人になりました。

ボケサンは4年間の現役部員の時期を中心としてお付き合いがありました。心やさしくて親切で鷹揚で、気安くものをいえるような雰囲気を持たせていたお人柄でしたから、教えを受けたことはいっぱいありました。ボケサンには部の役職の新人係を務めた経歴もあり、山の道具を売る店やその使い方、夏休みの笹ヶ峰ヒュッテ小屋番の仕事など、後輩たちに親切、丁寧に教えてくださる、優しい先輩でした。お父上並河功先生は当時全学の教養課程1、2回生の教育を担当した先生がたをたばねる京都大学分校主事をお勤めになった教育者であり、AACK会員でもありましたが、並河家を仲間数人でおたずねしたさいにお目にかかりました。話題が豊富、ユーモアをからめたイギリス留学時代の面白いお話などを聞きました。ご両親をはじめ、そうした暖かい家庭でそだったのでボケサンはジェントルでカインドな性格の持ち主になったのだろうと推察しています。

夏山や積雪期登山の大規模の山行では私はボケサンと多くの時間を共有しましたが、小グループの山旅でごいっしょだった機会は意外にすくないのです。山岳部の1954年晩秋の分散山行ではボケサン(農学部4回生)がリーダー、私(文学部3回生)、堀切尚三君(理学部2回生)、吉場健二君(農学部1回生)の4人は、南アルプス中核部の白根三山縦走を主目標とする約1週間の山行を楽しむため集まりました。この4人がパーティを組んだのはこの一度だけ、偶

然ですが南アルプスは全員これが初めてで、フレッシュな気分にあふれていたように思います。

当時の国鉄飯田線伊那大島駅を出発、落合、広河原を過ぎ、三伏峠を越えて三伏小屋に泊ったのは11月11日でした。この年は第2次大戦敗戦から9年後、盛夏以外の季節には奥深い南アルプスは交通便利な北アルプスよりは入山者がはるかに少なく、この山行ではほかの登山者たちにはめったに会わず、山小屋でもキャンプ地でも4人のほかに人に会いませんでした。本稿ではごく簡略に旅程の大要だけを記します。

12日、ほぼ稜線沿いに登って塩見岳3047mに登頂、雪投沢を下って夕刻谷間に適当なテントサイトをみつけて野営しました。13日、さらに沢をくだって大井川源流東俣谷出合いにつき、対岸の支流池ノ沢をのぼり、広河内岳を望む谷の上流部に幕営。14日はこの山行のハイライトというべく、南アルプス主分水嶺上にならぶ巨峰群、広河内岳、農鳥岳3026m、西農鳥岳3056m、間ノ岳3189m、中白峰3052mの頂上を順次踏んで、北岳小屋に入りました。このころ数日間は天候に恵まれ、雄大な岳と濃緑色の深い渓谷、これ以上の絶景は考えられないと感じ入りました。とりわけ間ノ岳は東南方意外に近く聳える富士山に劣らないと思わせるほどの貫禄を見せていましたね。

日本第2位の北岳3192mは、それこそ岩に覆われた城塞と言ってもよい岩峰です。その積雪期初登頂は1925年3月桑原武夫、四手井綱彦、西堀栄三郎などの三高山岳部員によって達成されたことを、私は桑原先生の『登山の文化史』を読んで知ったのですが、初めて南アを訪れたこの時点でこの知識がすでにあっただろうか、判然としません。どうも未読だったらしいと思う理由は、北岳と間ノ岳頂上部を含む5万分の1地形図「市之瀬」、「大河原」の該当箇所を事前に充分しらべたという記憶がないからです。

1954年11月15日、当時登山記録をくわしく書かなかったので辿ったルートや時刻を正確に再現できないのだが、北岳登頂後北方の肩から西へ直角に折れ、2841m地点へ延びる西稜

線をくだり、同所から西南へやや急勾配の山腹斜面をくだって野呂川源流の谷合いにある両俣小屋を目指すルートを探るべきだったのに、霧がたちこめ樹林帯に入って足元が暗くなってきて、下降ルートの踏み跡を見失ったのです。おーい、磁石を出せとなったときにボケサンも私も磁石を忘れて持って来なかったことがわかり、リーダーもサブリーダーも面目まるつぶれ、重大な失態です。山の経験が浅い堀切も吉場ももちろん持っていませんでした。植被を欠く高山帯は終わり、樹林帯までは降りていたので亭々たる巨木が林立し、低温のせいで下生えはまばら、そのうえ林床は急勾配という、ありがたい暗闇の中、結局は不時露営やむなしの結論です。急斜面でテントが張れる場所などあるわけが無い。4人がそれぞれに手近の立木根もとにザイルで自己確保して転落を防ぐ方策を工夫して、夜明けを待ったのです。

次の朝、幸い雨は降らず、空腹と睡眠不足のまま下方の野呂川源流の河原まで視界にはいり、かなりピンチな急斜面では手分けして通行可能なルートを偵察し、激しいアルバイトを続けること数時間、両股小屋より3kmほど下流、高度約1980mの野呂川河原まで無事降りることができたのです。ビヴァーク地点は高度約2400m、頂上からは約800mくだったところ、野呂川河原まで高度差約400mと判断しています。

正規の登山道に乗ってしまったので、河原でゆっくり休憩と食事をし、野呂川谷沿いにつくられた山道を下流に向かい、北沢長衛小屋の近くにテント設営し最後の泊まりになった。翌17日は最終日、北沢峠から白根三山に別れの

挨拶をおくる。鋸岳の文字通り鋸状の岩峰に一瞥を与え、戸台集落まで歩いた。ここからはバスに乗って、飯田線伊那北駅に到着、この想い出深い山旅は終了した。

後日ルームの報告会では、全コースのうちで一番迷いやすい箇所で見失ったこと、リーダーもサブリーダーも初めての山に入るのに磁石を忘れるとは何たることぞ、と厳しく批判されたのは当然のことであった。弁解の余地は全くない。これ以後、初めての山を歩くのに磁石を持たずに出かけたことはありません。

天候には恵まれ、大自然の懷に抱かれて平穏と静寂の世界に満足した山行に不時露営の一夜が加わり、恥ずべき失敗作となり、大きな顔で語るの是不自然ですが、敬愛するネボケ先輩とご一緒して、ともにドジを踏んだ忘れがたい思い出が残る山旅として、紹介させていただきました。

並河 治先輩、ボケサン、頼りない後輩、酒井オシメのこの拳をお許しくさいます。

ボケサンの霊安らかならんことを祈ります。



毛勝→劔合宿（1955年）のメンバー。
並河さんは右から3人目（魚津市、2018年3月）

ボケさんはボケてはいないー学生時代の思い出

谷 泰

私は、二回生になって山岳部に入った。そのこともあり、学年として一年先輩の並河さんにはすでにネボケという綽名が付いており、それをだれが、どういう理由で付けたかの委細を知らない。ただほそ目で、すこしねぼけ顔であるため、そう呼ばれたのだとまずは納得した。しかも私にとって最初の夏山合宿で涸沢に向かう日、上高地の梓川上流のつり橋を渡るとき、か

れがうっかり踏み板をふみはずし、落ちかけたのを見て、やはりボケさんだと、その綽名のふさわしさを一層確認した気になった。ただその後、先輩として並河さんを傍から見つづけるとともに、かれはボケてはいない、ボケたふりをしているのだという思いを強めることになった。

ボケてはいないと思ったその始まりは、この

穂高合宿の翌年だったか、笹ヶ峰ヒュッテでのある出会いに関係している。ちなみに京大山岳部は、その財政を、当時も笹ヶ峰ヒュッテの一般開放からの収入に少なからず頼っていた。そのためすでに夏山合宿に先んじて、一般に大学の夏季休暇が開始されるとともに宿泊者を受け入れることになり、その年は、並河さんと私とがその期間のヒュッテ番の役を担うことになった。そして、その季節最初の泊り客として、同志社女子大生三人がやってきた。もちろんわたしどもは、その若い仲良し三人組の女子大生の訪問をうれしく受け入れた。そして進んで下のダムなどへ案内をするだけでない。彼女らが調理したものをヒュッテ前の芝生に拡げて食べ始めるところに闖入して、お裾分けを頂戴するにおよぶ。こうしてたがいに楽しい時を過ごして、彼女らは去っていった。ところで私は、これら気持ち良い女性三人組のことを忘れたわけではなかったが、特に思い出す要もなく、長期記憶の一コマとして脳裏に書き留めたに過ぎなかった。ところが、それからいっときしてからのことだ。並河さんがふいに「あの同女三人組を覚えているか」と私に尋ねる。そこで私は、「うん。それで?」と尋ね返す。すると「おれ、あのだれそれ（谷；旧姓先念）さんと付き合ってるねん」というのである。小柄でこまめ、濃い瞳のしっかりした女性のことである。ただその時は、「おお、なんとボケさん、こっちに気づかぬうちにやるじゃない」と思うに過ぎなかった。それからやがて彼が彼女と結婚することになったのは、なん年後のことだったか。さほど遠くではなかったが、その彼女が、山陰の出身であるということ、その折知ることになった。ちなみに並河家もがんらい鳥取の士族の出自である。このことから、それなりの縁を感じたのかもしれない。単に囲碁が強いだけではない。なんという目の確かさ、素早さ。彼にとってかけがえのない一生の伴侶としての彼女を、私などが気づかないうちに目ざとくとらえて離さない。ボケてなんぞない。目覚めていると思うことになったはじまりであった。

ところで私が大学に入って、山岳部在学中の1950年代前半という時期は、それこそ朝鮮戦争期(1950-53)で、反戦のための授業ボイコットや破壊活動防止法(53年成立)反対デモなど、学生運動の盛んな時期であった。教養課程はま

だ宇治で行われていたが、宇治キャンパスでもしばしばストライキがうたれた。もちろん大学当局はそれにたいして強く臨み、宇治分校主事もまたその例外ではなかったが、並河さんのご尊父並河功氏は、この学生運動の盛んな51年から54年までの間、この分校主事の任を担わされていた。そういう訳で、わたくしども学生が大学に入ってまもなく耳にすることになった<並河功農学部教授>といえ、学生運動を抑えにかかる大学当局の一員としての存在でしかなかった。

ところが笹ヶ峰ヒュッテ番を並河さんと一緒にして以来、私は、烏丸車庫からほど遠くない彼の自宅を、いやそれこそかれのご尊父<並河功農学部教授>のお住まいをいくども訪れる機会をもつことになった。夕食後に訪ねた居間で、テーブルをはさみ、温厚な面持ちのご尊父からうかがう話は、広くご自身が出向かれた東西諸地域での経験談に及んだ。その話題のなかには、ご自身が訪ねたカムチャツカで、<海岸の絶壁に巣くうロッシンガモという鳥の群れを、現地の人が下から追い、崖上にいる仲間が箒で叩き落して大量に捕らえる>話から、<中秋の名月に食べるクルミ入りの月餅を中国ではウィピンという。餅(ピン)は日本ではモチと訓読みするが、餡入りの麦粉菓子を目指す>という話など、今でも鮮明に覚えている。こうして私は、並河さんの自宅を訪ねることを通じ、学生運動を取締る権力の手先という顔からはおよそ想像できない、深い園芸学上の専門知識にくわえて、広範な学識の持ち主である先生の姿を眼前にすることになった。そして、こういう父親のもとで育った子として、並河さんがはやくから、ご尊父と同じ広く世界の植物世界に関心を向けることになったその成り行きを、ごく自然なこととして理解した。

ただ子供にとって親というものは、たんに先達として見習う相手として立ち現れるだけでない。抗すべき相手としても立ち現れる。いや、まさに抗することで、たんに見習う相手としての父とは区別される自己固有のアイデンティティが確立され、ひとは初めて一人前の大人になる。こういうとき、もしその父親が社会的に著名な父であるとき、その息子はたんにその偉い父親に抗するだけにとどまらない、御曹司という言葉につきまとう、いわれなき周囲の眼に

たいしても抗さざるを得ない。並河さんは、まさにそういう重荷をそれなりに意識して大学生を送らざるをえなかったのではなからうか。

というのも並河功先生は、東北帝国大学（現北大）農学部を1916年に卒業、助手となり、のちに教授となったほぼ二十年間を北大で過ごしている。その間、蔬菜園芸学の分野の研究者としてイギリス、アメリカに留学するが、帰国まもなく1938年に京大農学部教授として京都に赴任している。並河さんは、ご尊父が京都に赴任する数年前に北海道で生まれていることになる。ところで先生は、京大に移ってすぐ農学部長の重責を担う。また太平洋戦争が始まり、先生はこの時期、中国を広く訪ね、東アジアの植物に関する専門知識にとどまらず、現地事情について多くの見聞をうる。カムチャツカの話はその時の先生の足跡の広さを示す一エピソードにすぎない。なお先生は北大在籍中スキー部にも関係しており、一年下の当時は植物生理学の専門家でありながら北大スキー部の草分けであった木原均先生とすでに知り合っていた。こういうこともあり、京都に赴任して以後、木原さんとの交流は一層深まる。ところで戦後の京都では、今西さんをリーダーとする京都大学の山仲間が、学術的探検・登山をめざして、新たな出口を求めてうずうずしていた。そして今西錦司、中尾佐助、吉良竜夫、梅棹忠夫などが、木原さんをも巻き込み京都生物誌研究会（F・F = Fanua and Flora の略）なるものを組織し、その会長としてすでに学内で重要な地位をしめていた並河先生を立てた。こうしてついに1955年、このF・Fを組織母体として京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊という戦後最初の海外学術調査隊が構成された。そのとき大量の装備を梱包するために山岳部員が駆り出され、三回生のわたしも身近に今西さんや中尾さんなどに接する機会をもつことになった。並河さんはそのとき四回生であった。

以上これだけのことを言えば、並河さんが専攻先とした京都大学農学部でも、また入部した

山岳部でも、並河功という父の影がいかに色濃く影を落としていたかが了解されるはずだ。それに加えて彼が京都大学に入学した時点以来、学生を取り締まる当局の一端を担うものとしての父親をもち続けることになっている。つまり普通一般の学生とは違って、自らが属する学部の大教授であり、自らが属する山岳部の先輩たちの先輩であり、さらに自らが在学する大学当局のトップにある人物の子という、三重の外部的視線のもとで生きなければならなかったと言える。こういうことでなければ、並河さんも、他の山岳部員で、山登りを続けるために、さらに学業を深めるという口実をもうけて大学院に残り、結局アカデミズムの世界に進むという選択もありえただろう。それにたいして彼は大学院を修了するとともに、アカデミズム世界に残る道を選ばず、神奈川県フラワーセンターに就職すべく京都を去っていった。御曹司などという外部の視線の及ばない、また権力の手先という視線の及ばない世界に出て、自らのアイデンティティをひとりで確立する道を選んだのである。

それにしてもどこで、いつ学んだか、わたしは知らない。かれは、自らにつけられたボケという綽名をまさになぞるように、コンパになるとどぶろくをあおり、呆けたように一升瓶を振り回して戯れ踊った。大学時代のあれは何だったのか。いま考えてみるとそれは、御曹司でもない、権力の手先の子でもない呆け者を演ずることで、これらの外部の視線を逸らしていたと思えてならない。もちろん戯れ者はボケを演ずるが、ボケてはいない。そしてボケを演ずることをつうじて、愚かさを免れ得ない人間のサガを見据えることになる。かれはこうしてついに、愚かなる人間のサガを共に認め合った地平で共に生きるべく、あの穏やかな笑みで人に対する洒脱な大人になり、多くの格言を残すことになったのだと思う。仏さんたちも彼を歓迎して受け入れてくれているに違いない。

並河ボケさんのこと

松井敦男

ボケさんが川にかけられた丸太橋を渡る時、足を滑らして川に転落した。冷たい水から、頭を出したボケさんは、細い眼のままだったことから「ネボケ」と綽名がつき、その名はやがて「ボケさん」となった。

ボケさんは、牛の顔をみると、その牛の血統が分かるほどに、鋭い感性の持ち主であった。

偉大な農学者であった。学業成績優秀の仲間が思いついた研究課題が、ボケさんには意味のない課題に見えたことを、何度か聞かされた。

ボケさんのお父上は、ボケさんの聡明ぶりを当然のことよく御存じで、「ネボケが云々」、「ネボケが云々」と、楽しげに、そして愛情を込めてお話であった。

貴族としてのボケさん

岩坪五郎

1955年3月京大山岳部は、脇坂ザッカスを隊長に毛勝～猫又～劔の縦走を行い、オシメ、高谷の2隊員が劔頂上に達した。松浦、荻野、ゴジラ、パイマン、五郎らが1回生として参加した。装備係が用意した荷物を、新人隊員は軽いのをめざして飛びついた。その時、「ばか、

待て。お前らは乞食か。貴族としての誇りを持って。」との、並河ボケさんの大音声がとどろいた。われわれは軽い荷物を得ようと、飛びついたのである。貴族であらねばならないのに。以後、ボケさんに会うたびに、貴族でなければならぬと自責している。



ケンタツ小屋にて。並河さんは前から2列目、右端（2015年5月14日）

編注：オシメ＝酒井敏明、ゴジラ＝高野昭吾、パイマン＝潮崎安弘

並河治先輩・ボケさんを偲んで

松浦祥次郎

ボケさんのご命日、2023年12月3日は忘れ得ない日になりました。ボケさんを偲ぶ会（12月14日）からの帰宅途中の車中への電話で、私が原研に入所した年から長年に涉って、大変お世話になった大先輩がボケさんと同じ日に逝去されたとの知らせをご息女から受けました。共に私の人生に大きな恵みを残して頂いたお二人が、偶然とは言え同日に逝ってしまわれたという喪失感に心が空になってしまいました。原研の先輩からは原子力道を職業として選ぶ事の価値と覚悟を、山登りの先輩ボケさんからは自由の精神を拠り所にする生き方の喜びをお示し頂いておりました。

ボケさんの生き方は、自由の精神がもたらす悠然とした剛毅な力が、職業分野を何処に選んでも、その分野の次元を限りなく広大なものと考えられるようにして頂きました。そのお蔭でかなり厄介な原子力時代に長く過ごしながらも、常に生き生きと挑戦的に生き抜くことが出来たようです。何より残念な事は、ずっと若いときに囲碁に惹かれ関心を深めながら、それを趣味とすることを早くに断念し、囲碁を通じてのボケさんの深い知恵に接する機会を失ってしまった事でした。しかし、これも人生選択の「妙」であったと思います。

ボケさんの自由な生き方を考える場合、まずお酒が頭に浮かびます。酒豪という言葉さえ不十分なほどで、もう十分に酒仙の域に達して居られたのでしょうか。聞いては居ましたが、熱いお茶では無く、爛酒でお茶漬げご飯を食べられるのを目にして芯から驚きました。しかし、いくらお酒を楽しまれても、お酒に飲まれることが無かったのは一層の驚きでした。お酒好きの知人・友人は沢山居ましたが、ボケさんの様な仙域に達している人は他に接したことがありません。ボケさんは「お酒の徳」を示す資格を持った、全く希有な方だったのでしょう。

ボケさんとご一緒に一番長く過ごしたのは、京大山岳部の活動中では無く、ずっと後、70

歳を過ぎてからでした。国から任命された任務の退任後、ぜひ直ぐにも実行したかったのは、石楠花の原産地・故地、即ち中国雲南省の一部からチベットの一部にかけての山旅でした。私は山の花では特に石楠花が好きで、かねてからその原産地を訪ねてみたいと渴望していました。役職退任後の時間の自由な時期を捉えて、今は亡き笹谷ベベちゃんが計画準備万端を整え、ボケさんをリーダーにした「シャングリラ地区石楠花探索・梅里雪山事故遭難者慰霊」の大キャラパンの山旅を実施できるようにしてくれました。笹谷夫妻始め、何組かは夫人同伴でした。私も妻を伴いました。梅里遭難者の事後捜査で大活躍をした小林バコヤシ君が唯一の若手メンバーとして特大の支援をしてくれました。

この山旅でボケさんから教えられたことは膨大に過ぎ書き切れません。特に私の無知蒙昧を払って頂いたのは、花卉育成・栽培や野外フィールドワークと国際情勢の変動との深い関係でした。例えば、「19世紀帝国主義—英露の覇権主義のインド北西部での睨み合い—プラント・ハンターによる石楠花採取—英国ロンドン植物園の品種改良—世界の大都市街路樹の石楠花並木—日英同盟締結—日露戦争勝利」が種々関連している等と言うことは想いもかけませんでした。ボケさんの現地でのお話で私の歴史観を決定的に訂正して頂きました。

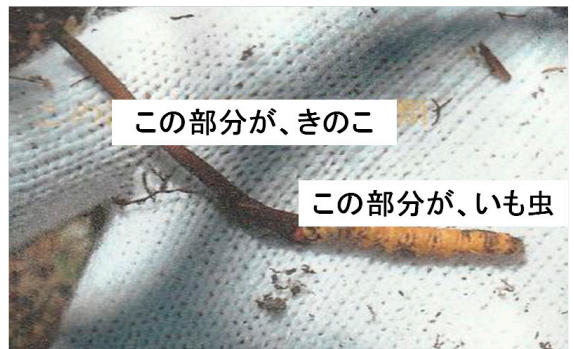
もう一つの例は、「冬虫夏草」です。これはやや以前にTVの韓国歴史もので、宮中で珍重された万能薬として知りましたが、詳しくは分かりませんでした。それがこの山旅中に、自生の冬虫夏草にお目にかかることが出来たのです。私には驚天動地の事でした。それ以上に、このようなものが出来る仕組みに、生物進化の必然が含まれているとのお話でした。まさに、今西進化論の真髓「生物は進化すべくして進化する」を直に示して貰った驚きでした。しかも、これが有効か否かとは別に、この地域社会の変化の原動力の一つになっているとの説明でした。これは現在高価に売れるので、農家、特

にその若者が牧場の牛を売ってオートバイを買い、そこらを走り回って、大々的に冬虫夏草を採取し、これが遠からず絶滅するのでは無いかとの危惧や、農村の経済状況に急激な変化を起こしているとの話です。世界の技術進歩の影響が辺地に及ぶ構造の実例に触れました。ボケさんが中国の科学技術的社会主义進歩礼賛の政策に極めて厳しい批判をされていたのを今思い起こさざるを得ません。滅多に出来ない勉強をさせて頂きました。

最後に、驚きと絶賛を捧げたいのは花卉育成・栽培へのご貢献です。12月14日の「偲ぶ会」が終了し、会場の外でご家族にお別れのご挨拶をした時に、ご祭壇に飾られていたバラを数本ずつブーケのようにして頂きました。歩きながら改めてそれを眺め、素晴らしい輝きに溢れた色合いに愕然とした驚きを感じました。誰言うともなく「このバラ凄いね」と感心し合いました。花びらの美しい輝きが並大抵のものでは無かったからです。花びらの表面の滑らかさ、花びらの内側から滲み出すような輝きを感じました。言葉を失う見事さでした。しかも、その美しさを、帰宅した後、花瓶の中で何日も何日も、驚くほど長く保ち続けました。花が放つ最高の「徳」を感じさせられました。ボケさんは、人々に「花の放つ徳」を感じることが出来るよ

うにとの願いを込めて、生涯に渉り花卉育種・栽培を心懸け続けられたのでしょうか。遅まきながら、衷心より感謝と尊敬の念を捧げさせていただきます。涅槃の平安をお祈り致します。

合掌



不老長寿の秘薬、冬虫夏草を地元ガイドが採る
(谷口朗撮影、2006年5月22日)

「並河 治」先輩の御霊に捧ぐ

1956年探検部入部（第1回生） 藤本栄之助

私は4年間を探検部で活躍しましたから、並河 治先輩には直接指導を受けたことはありませんし、登山に同行したこともありません。しかし、川喜田二郎先生や探検部員の本多勝一、曾根原恵夫、沖津文雄などの諸先輩から、そのお人柄や植物学者としての功績、そして未知の世界へ挑戦する心構えとしての「貴族精神」、総合的に言い換えれば pioneer 精神の実行者としての逸話などを拝聴して育ちましたから、ただ唯遠い世界の憧れの人にすぎませんでした。

あれから60年以上も長い年月が流れていきまして、今山陰地方でお世話になりながら、国連が決議しましたSDGs精神に沿って「脱炭素」社会創成のために、バイオマス事業開発に従事

しておりますと、この地方に多い「並河」という姓には、大学教授、医者、企業経営の代表取締役が多く、「並河」家は名門の家系であることも知りました。

ごく最近になって、斎藤 Y 先生に教わったことですが、西南戦争の際には並河先輩のご祖父様は熊本城守備隊の伍長として参戦されたそうです。私は、西南戦争の激戦地「田原坂」や山鹿市の「鍋田台」の近くで育ちましたし、わが藤本家はその近郊の「城北村」の庄屋をしておりまして、西郷軍の支隊である「党薩熊本隊」の最前線の陣屋になり、私の祖父は13才（慶応元年生まれ）の少年でしたが、毎日運び込まれて土間に横たわる血だらけの兵士

の姿におびえながら逃げ惑ったという話を聴いておりましたから、並河先輩にはぜひお会いして3世代前のご縁のことを話したいと、熱望しておりましたのに、こんなに早くあの世に旅立たれるとは、残念でなりません。

「幽明を境にする」とか「幽明境を異にする」と云う言葉がありますが、できることならJean Cocteau がギリシャ神話の”Olphe”に倣って書いた抒情詩のように、鏡を通してでも並河先輩との会話をしたい気持ちです。

今、地球環境は回復不可能なまでに汚染されつくしておりますのに、日本政府の施策は間違った方向へ動いております。森林におけるCO₂のリサイクル周期は少なくとも50年から数百年の長い周期で回っておりますのに、森林資源をエネルギー源に燃やしてもCO₂は再び森林が吸収するという短期間のリサイクル周期を是認して、間違った「免罪符」を与えており

ますから、大企業はそれをいいことに森林を大規模で伐採し尽くして、美しい緑の山々を虐殺しようとしています。日本独特の森林資源を死守するために、今こそ植物学者の並河 治先輩のお力が必要でしたのに、どうかこれからでも天国からわれわれにお力添えをお願い申し上げます。

ピカソが死んで50年、彼が描いた「ゲルニカ」の悲劇は今もウクライナで繰り返されています。坂本龍一も、並河 治先輩のあとを追うかのようになりまして。彼の美しいメロディー「戦場のメリークリスマス -Merry Christmas! Mr. Laurence」は今もなお、私の心を鼓舞してくれます。並河 治先輩もどうかいつまでも天国からわれわれに激励のお言葉を投げかけてください。

合掌

ボケさん、ありがとう

脇野征一

「ボケさん」この呼び名はなんと慈愛に満ちた渾名でしょうか。私たち山岳部は日頃先輩、後輩の別なく渾名で呼び合っていますから滑稽な、或いは面白い渾名が沢山ありますが、この「ボケさん」ほど後輩の我々にとって優しさとお親しみを感じさせる渾名は有りません。

57年入部の私たちはこの年の北岳バットレスでの夏山合宿に続けて南アルプス縦走をしました。その北岳から塩見岳への縦走を大先輩の並河ボケさんがリーダーとして引率してくれました。この山行はバットレスでの新人訓練という厳しい夏山合宿から解放された安心感とボケさんの優しい人柄によって、忘れることのできない楽しい記憶として私の脳裏に刻まれています。

60年前の記憶を辿ってゆけば、オバマ(故人、小浜維人)が塩見岳近くの稜線で夕日に映える富士山の姿に感動して「旅の空から見た富士山は～」と歌った親譲りの美声(お母さんは宝塚音楽学校の先生とか)が甦ります。尾根を行く縦走ですからテント設営は概ね高地になる上に、間ノ岳付近の水場は殊更に低地にしかない様で、朝夕のこの高低差を往復する水汲みのし

んどかったことは格別でした。ボケさんがヒョイヒョイと先に汲んで来てくれたあとで、私たち新人は体力自慢のエースケ(原田道雄)はじめ皆んなフラフラになったのは、楽しい山行の中でも唯一の苦しかった思い出です。

「しんどい」と言えばこの縦走もまた結構しんどいのですが、途中で南アらしい高山植物のお花畑によく出会い、心が安らぎました。ボケさんはこれらの花の名前を(当然ですが全部知っていて)聞けば全て教えてくれました。私は「みやま」とか「きただけ」ではじまる花の名前をもう全部忘れてしまって思い出せません。ボケさんごめんなさい。こうして楽しい山行も終わり塩見岳を下山して、汽車と徒歩で笹ヶ峰牧場へ向かいました。牧場の門廻りから京大ヒュッテの実物が見えたときはその見事な佇まいに感激したのをよく覚えています。ヒュッテでは小屋番としての数日の下働きをして、私達の夏山が終わりました。

この山行は一回生の私にとって初めての本格的な山登りで、新人として必要な知識を体得出来た貴重な経験となりました。同時にボケさんの

類いまれな優しい人柄に接した忘れることのできない楽しい思い出です。改めてご指導に感謝

申し上げます。ボケさんありがとうございました。また逢う日までさようなら。

“Guten Kameraden”

伊藤寿男

題記タイトル（ドイツ語）は後述しますが、並河ボケさんのお別れ会の際、山岳部 OB 全員が、ボケさんへのはなむけとして厳かに斉唱した2曲のうちの一つの曲名です。

先ずは大先輩に向かってボケさんと気安く呼ぶ失礼をお許し下さい。かつては私とボケさんの関係はあまりありませんでした。年齢も離れており、山もご一緒したことはありません。ボケさんのお好きな囲碁も私はやりません。しかし関東在住も長くなると AACK 関東会の新年会や、北山会、雲南懇話会などの集まりにボケさんは律義に顔を出されるので、接触する機会も多くなり、また東京での会合の後、兩人とも東海道線で帰宅するため時々ご一緒することもあり、いつの間にか気安くお話する間柄になりました。かくして、ボケさんの気さくなお人柄、広く深い見識、海外の山や探検での豊富な経験などを伺うにつれ、ボケさんに惚れ込んでまいりました。

今でもボケさんに感謝している件があります。私の最後のビッグ山行として、K2 を観るため6年前、バルトロ氷河経由、コンコルディアで3日間滞在してたっぷり K2 を見た後、ゴンドゴロ・ラを越えてフーシェ村に下り立つといった気楽な個人山行をしました。道中の素晴らしい景色と色とりどりの高山植物をたくさん撮って帰りました。この中でも特にきれいな高山植物の写真を20枚ほど引き伸ばし、ボケさんに花々の名前をお聞きしたことがあります。バラとかチューリップとか、人口に膾炙した一般的な名前をお聞きした積りでした。ボケさんは写真を持ち帰り数週間後、属、科を記載した学術的な名称や特記事項を書いて返送して下さい、感謝するとともに大変な手間をお掛けしたと恐縮した思い出があります。

お別れ会でも山岳関係者以外にもボケさんの

指導を受けた複数の方々が席上で深甚の謝意を表しておられました。

あのお人柄から、さも有りなんと容易に拝察することが出来ました。気取らず、気さくに話をされ、誰に対しても平等に対応される包容力のある立派なお人でした。

表題の“Guten Kameraden”について説明致します。これはナチス軍の軍歌の曲名です。「親しい戦友」とでも訳せばいいのでしょうか、戦死した仲間を葬るときの歌だそうです。京大山岳部でも遭難して亡くなった部員を葬るときに代々歌われてきた歌です。私も学生時代「眼下の敵」という米映画で、初めて本物のドイツ語のこの歌を聞きました。駆逐艦とUボートとの虚々実々の頭脳合戦の戦争映画でしたが、劇中、戦い終えて、戦死したドイツ水兵が水葬されるのを両軍兵士達が見守る中、ドイツの水兵達が歌い出し合唱したのがこの歌でした。なかなか状況にマッチした荘重な感銘深い、いい歌でした。

当時山岳部の集まりなどで先輩諸氏が出席されると必ずこの歌が登場し、ますます好きな歌の一つになってきました。AACK 関東会の新年会では数曲歌うドイツ語の歌の一つとして必ず歌う歌でしたが、最近では会場の関係で素晴らしい山の歌を歌わなくなってきたのは淋しい限りです。

私にとってまさしく「Guten Kameraden」の一人であったボケさんを見送るのにこれ以上の歌は無いと、機会あれば皆でこの歌を歌わせてもらおうと願っていた歌でした。ところが、今回のお別れ会では、コロナの関係から、会場で歌を歌うことはままならず、山岳部部歌である「雪山賛歌」のテープをバックに流して、山岳部部歌2曲の歌詞を朗読するという事になっていました。

それがお別れ会の当日の早朝、谷口さんから

メールが入り、「歌うことが可能になった。ボケさんが喜んでくれるなら何をやっても構わない。伊藤さんの思う通りにやって下さい」と大変有難い言葉を頂きました。谷口さんのご尽力に感謝しつつ、ボケさんのお別れの会にふさわしい「Guten Kameraden」1曲、およびもう1曲、山岳部部歌の一つ、大先輩の本多勝一さん作詞作曲の、これも本日のお別れ会にピッタリな「原始林」の計2曲を、当日出席する山岳部OB全員で斉唱してボケさんのはなむけとすることが急ぎよ決定されました。ドイツ語を含む両曲の歌詞も、山岸さんが予め準備しておいてくれたので、突然の決定にもスムーズに対応出来ました。

結果的には、山岳部OB全員による見事な合唱が、心のこもった素晴らしい響きとなって、参列者に大きな感動を与えました。ボケさんも

大変喜んで下さったと信じています。

ボケさん 長い間 本当に有難うございました。

合掌



大山山麓の宿「奥村」にて、ボケさんの喜寿を祝う
(2009年12月9日)

並河さんへの手紙—追悼文に代えて—

阪本公一

2009年1月4日

並河治様

迎春

11月末には、思いもしなかった所で大兄にお会いし驚きました。芦火荘は小さな山小屋ですが、地の利もよく昔ながらの山小屋生活を楽しめる素晴らしい小屋です。しかし、山城高校山岳部のOBでまともに山登りを続けている人は非常に少なく、残念なことに芦火荘を利用している方は極めて稀な状態です。山岳部出身者ではない私が、芦火荘を一番利用しているので、いつの間にか私も芦火山岳会の会員になってしまい有り難く芦火荘を使わせて貰っています。

昨年は京都府山岳連盟の60周年にあたり、それを記念して京都府山岳連盟が編著した「京都北山から」という本がナカニシヤ出版から昨11月に発行されました(¥1,800+税)。これまで積雪期の北山を本格的に縦走した人が殆どなく、記録も全く残っていないので、この7~8年冬の北山へ通い続けている私に執筆の依頼があり、「冬の北山縦走」という文章を書きました。御参考までに、私の執筆した文章6頁の

コピーをお送りします。本格的な積雪期の北山縦走の記録は毎回残していますが、下記の縦走記録のコピーも同封申し上げます。

2004年3月5日~9日:湖北中央部蘆山縦走(福井・滋賀県境の山塊)

2005年2月14日~18日:積雪期由良川源流分水嶺縦走

2008年2月22日~25日:厳冬期京都北山最深部ヤブ山縦走

今年は、2月23日~28日の予定で、若江国境尾根南部(地藏峠—三国峠—百里ヶ岳—若狭駒ヶ岳)の縦走を計画しています。そのトレーニングも兼ねて、1月17日~18日は坊村から鎌倉山(950.5m)、峰床山(970m)に登り、芦火荘に宿泊した後、大見から小野谷峠に上がって大見尾根を花脊峠まで歩く予定です。京大山岳部1回生の田中貴君も参加したいとの事なので、この北山ラッセル山行で何をかつかんでくれればと期待しています。御参考までに、山行計画書を同封しておきます。懐かしい地名が出てきて、青春時代を思い出されるのではないのでしょうか?

昨年暮れに、谷口さん達が、並河ボケさん御

推薦という日本酒を3本送って下さいました。私はウイスキー党で日本酒は殆ど飲みませんが、娘婿達が日本の酒好きでよろこんで飲ませて戴きました。栃木から長女一家が12月26日にやってきて、その前に里帰りしてきたトロント在住の次女の夫（カナダ人）と毎晩日本酒を飲み始め、谷口さんからお送りいただいた日本酒3本は年末までになくなっていましたようです。その後は、越乃寒梅とかいろいろ飲んでいたようですが、彼等の意見では「八海山」が一番口当たりのよい酒だとの評価でした。銘酒を御推薦いただいたこと、厚く御礼申し上げます。

芦火荘でお会いしたとき、ラダック・ザンスカール・トレッキングの紀行文を読まれて「グドはなかなか良い文章を書くね。」との有り難いコメントを大兄から戴きました。文章が得意とは思っていませんが、書くのは好きで、充実した山旅が出来た時は、記憶の薄れない中に何時も紀行文を残しています。昨秋のロールワリン遠征の記録を含めた海外の山旅の紀行文を幾つかお送りしますので、もし御興味あれば、お暇な時にでもお目通しいただければ幸いです。

2008年10月10日～11月18日：ロールワリン・ヒマラヤ ラムドン・ピーク（5925m）登頂
2006年6月24日～7月24日：ピアフォー氷河・ヒスパー氷河トレッキング

2005年6月10日～7月6日：ポリビア・ア
ンデスの山旅
2003年10月10日～11月11日：アンナプル
ナー一周トレッキング
2002年5月21日～6月28日：康南の秀峰ダ
ンチェツエンラ（5833m）初登頂
1996年8月22日～9月3日：エクアドル最
高峰チンボラソ（6310m）登頂記

今年は4月～5月に約1ヶ月の予定で、石楠花や桜草、猫の目草等の花を見に、ネパール・ヒマラヤのランタン谷からゴザインクンド、ヘランプーへ谷口さん、福本さん達と出掛ける予定です。夏には、又インド・ヒマラヤのザンスカールへ入る積もりです。未知の氷河を踏査して、未だ誰も見たことのない未踏の6000mの山々を探査してきたいと、約40日の計画です。私も今年4月で69歳ですが、ヒマラヤやカラコルムにはまだまだ行きたい所があり、夢はどんどん広がって来年以降の海外の山旅の計画も幾つか煮詰まっています。何時まで身体がつづくかが、問題ですが・・・。

これからまだまだ厳しい寒さがつづくと思いますが、どうか御自愛下さい。

九拜 阪本公一

ボケさんと碁

古瀬駿介

丹沢の麓にある旅館で一泊し、碁の会を開くのが、10年以上前からの関東在住の山岳部OBの慣例でした。私も何回かは参加していました。メンバーで一番強いのはもちろん並河ボケさんで、私などは何日も置くのですが、終わってみれば負けているということが殆どでした。碁が終わるともちろん飲み会となり、泊まった翌日は丹沢散策を楽しみました。

勝負事はその人の性格を表すと言うそうですが、ボケさんの差す手は飄々として捉えどころがなく、全く予測のつかない感じがしました。他人から見て予測のつかない、とらえどころのないむつかしい人なのに、それでいて何か、がっしりとした骨格を持った筋の良い手を打っておられたような気がします。

ボケさんは東北の地酒が好きでいつも同じ銘柄の酒を持ってきておられました。私は、最近ではめっきり酒も飲めなくなってしまいましたが、丹沢と碁と酒に出会うたびにボケさんをなつかしく思い出しています。



ボケ碁塾にて

追悼 並河ボケさん 囲碁と雲南懇話会の思い出

前田栄三

謹んで並河ボケさんのご冥福をお祈り申し上げます。

私がボケさんを囲む集いに参加させていただくようになったのは、2002年頃からと思います。旧い手帳を捲りますと、次のような記述がありました。

“2002年03月23日13時00分、JR二宮駅集合、AACK 囲碁会”

“2002年10月26日10時30分、JR二宮駅集合、AACK 囲碁会”

“2003年04月12日10時30分、JR二宮駅集合、AACK 囲碁会”

“2003年08月02日14時00分、箱根「大平荘」集合”（金時山にて植物観察会）

“2003年11月22日14時00分、箱根「大平荘」集合”（浅間山、鷹巣山、畑宿）

“2004年03月27日10時30分、JR二宮駅集合、AACK 囲碁とグルメの集い”

“2004年10月09日13時30分、湯河原温泉「中屋旅館」集合”

“2005年03月12日13時30分、湯河原温泉「中屋旅館」集合”

“2005年12月10日14時00分、箱根「大平荘」集合”

（AACK とあるのは、AACK 関東会のことです。念の為、申し添えます。）

ボケさんのご自宅（神奈川県中郡二宮町）、或いはボケさん所縁の温泉宿（箱根大平台、湯河原温泉、陣屋温泉「陣馬の湯」、1泊2日）で、集いを催されていました（写真1）。何時の頃からか、丹沢・大山山麓にある先導師「奥村」が定宿になりました。『奥村』の女将が体調を崩された2016年秋以降は、拠点を小田急線生田駅前の（谷口朗先輩所縁の）『碁楽室』という名の碁会所（写真2）に移し、年に2回ほど囲碁に特化した集い（日帰り）を継続（2019年12月まで）していました。

囲碁の面でも、ボケさんとは「碁の格」「風格」「品格」の違いを認識させられておりました。ボケさんは、どこか昭和の名棋士・二十二世本因坊秀格（本名：高川 格）の棋風に似ている

ように感じていました。ウィキペディアによりますと、“（高川 格は）本因坊位の他にも、名人、十段等タイトル多数の、昭和を代表する名棋士の一人。「流水不争先」（流水先を争わず）を信条とし、平明流とも言われる、合理的で大局観に明るい棋風”、とありました。ボケさんの平易な打ちまわしに、風雅な気風を実感してもしました。所謂、位負けです！

雲南懇話会（2004年12月設立）では、2回講演していただきました。第1回（2005年3月26日、学士会館）と第16回（2010年12月11日、JICA国際会議場）です。演題は、「雲南の山の植物」（第1回）と「雲南省の石楠花」（第16回）でした。



写真1 「ボケさん塾」植物教室（2003年11月23日）。ボケさんは後列、右から2人目。—お別れ会の展示資料から—



写真2 小田急線生田駅前の『碁楽室』にて

2019年8月2日、京都大学東京オフィス内会議室で「昼食会」を開催し、雲南懇話会活動の概況、翌年5月に予定された京都フォーラム開催に至る経緯とその概要について、報告しました（AACK Newsletter No.92, March.2020）。その折、ボケさんには、ご挨拶と献杯のご発声をいただきました（写真3、4）。

2020年5月に予定した京都大学時計台記念館での開催は、コロナ禍で延期に次ぐ延期を余儀なくされ、2021年12月18日に至り、漸く開催することが出来ました。ボケさんもお元気なお姿で参加され、西北ネパール学術探検隊（1958年、川喜田二郎隊長）のアップー（奥）ドルポ踏破の一端を披露されておられました。

2022年2月20日、ボケさんを交えた2面だけの小さな碁会の開催を意図したものの、2月28日にボケさんが倒れられて叶わず。9月に至って“ボケさんのご回復を祈る集い”として実現しましたが、私たちの願いは届かず残念

なことでした（写真2）。

『奥村』の集いの後の日向薬師に向かう道すがら、「この神社は嫌い」と仰った、柔和で茶目っ気たっぷりの笑顔が、とりわけ鮮明に思い出されます。見ると、“ボケ封じ”と書かれた幟が鳥居の前にありました。ナンテン（南天、難転）の杖を愛用しておられた立ち姿、「酒茶漬け」という言葉を愛し、よく口にされた朝餠の風景が偲ばれます。

合掌。



写真3 雲南懇話会幹事団との昼食会でのご挨拶（2019年8月2日）



写真4 雲南懇話会幹事団との昼食会にて。ボケさんは、前列右から2人目。

並河治さんの死を悼み、ついでに家内を追悼します！

京大名誉教授 佐々木隆造

山にも植物にも縁のない私は、晩年になって並河治さんの領域にちょっとだけ侵入した新人でありますので、まず自己紹介から。1938年/昭和13年に徳島の田舎で生まれました(現時点で85歳)、大学受験のため船で初めて本州にやってきました。県立城東高校卒業、この高校の前身は女学校で市内の仏壇屋の娘瀬戸内寂聴さんは先輩、今年の春の選抜高校野球大会には初出場します。1957年/昭和32年に京都大学農学部農学科に入学、山岳部部員の谷口朗さん、酒井尚平さんとは同級生であったようです。「ようです」というのは、大学で彼らに出会ったという記憶がないのです。歳月は流れ、彼らに再会(?)したのは、私が68歳で家庭の都合で京都から東京に移住してからです。東京に来て囲碁を始めました、ルールは知っていましたが実力3級くらいでした。プロにも習いました、学士会の囲碁会に所属し今は2段でやっています。谷口さんは私よりかなり強いのですが、ちょうどよい先生であり、彼が共同経営する生田碁楽室には頻繁に行っています、死ぬ前には私が白石を持つのが夢です。家内(旧姓北村幸子)も同級生であり、農学部で唯一の女子学生でありましたから、それなりに広く認識されていたようです。酒井さんの絵の展覧会やら会合にはいつも参加して、皆様との旧交を温め新しい出会いを楽しんでいました。並河さんは1955年/昭和30年京都大学農学部農学科卒業で5年くらい先輩であり、専門課程での所属研究室が異なりお会いしたことはありませんでした。並河さんは花卉園芸学を、私は家畜栄養学を専攻し、ついでに家内は花卉園芸学研究室の卒業生です。

それは2021年/令和3年12月22日(火)のことでした。おおよそ60年前から「ボケさん」というけったいな名前の先輩がいることは知っていましたが、この日にはじめて出会い、そしてこれが最後の出会いでありました。「ボケさんが囲碁をやるために来ます、あなたとは直接の知り合いでないようですが不思議な縁があるようなので来ませんか、塩瀬捷一郎さんも来ま

す」と誘われました。ボケさんは6段くらいだそうで、相手をしてくださいました。厳しい攻めがあるわけでもなく、大きな地を稼ぐような気配もなく、タンタンと打ち進み、終わってみれば完敗、これが囲碁のやり方の真髄で、「田んぼも山も奪って攻め滅ぼす!」という私のよくやる囲碁は外道のやることらしい。それから近くの蕎麦屋で昼食、農学科の昔話を沢山してくれました。記憶は正確で言葉も歯切れよく90歳近くとはとても思えない、これは面白い方と知り合いになったと思いました。新年(2022年)に2回目の囲碁会の予定もあったのですが、ボケさんが体調を崩され実現しませんでした。

さて、「不思議な縁」とは私の家内の両親がボケさんの結婚の仲人を務めたことです。家内の父親は北村四郎、理学部の植物分類学者でした。分類学というのは生物学の基本でありますので、義父はほとんどの農学部の植物に関する研究者と知り合いであったようです。ボケさんのお父様の並河功先生は、農学部花卉園芸学の初代教授で、義父は功先生と昵懇の仲であり、仲人をお引き受けした直接の原因でしょう。両親がボケさんの結婚の仲人をしたというのは学生の頃に家内から聞いていましたが、その理由を確かめていませんでした。ボケさんと義父との直接の接点もあったかもしれませんが、そのあたりを確かめるのが2回目の囲碁会とっていましたので残念です。

京大農学部は1923年/大正12年に発足し今年で100周年を迎えます。農学部創設は1921年/大正11年に計画され、推薦された教授候補者は一斉に欧米に派遣留学されました。初代の教授は東大あるいは北大(東北帝大農科大学)の卒業生で、並河功先生は北大出身です。コムギの遺伝学で有名な木原均先生も北大出身、京大理学部植物学教室の助手を経て農林生物学科の教授に就任した人事には功先生が関与したようです。私は農芸化学専攻栄養化学研究室で大学院課程を過ごしましたが、ここの初代教授も北大出身の近藤金助先生でした。そんなことで、初期のころの京大農学部は東大系と

北大系との競合の場でもあったようですが、北村四郎は北大系の先生方により親しみを感じていたように思います。1955年/昭和30年京大カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊には木原先生と一緒に参加しています。

ボケさんという異名は、ほんまにちょっとトボケタ御仁由来なのか、それとも花好き（ボケの花）由来なのか知りません。生田の囲碁会での印象やら、後々の花を愛した仕事ぶりから見

て、後者だと想像しています。ボケさんとの2回目の囲碁会がなくなったこと、そして最初の囲碁会に家内を同道できなかったことはとても残念です。家内は2021年/令和3年1月に肺がんのため死去しました。彼女は囲碁はやりませんが、蕎麦屋ではボケさんとの会話をとても楽しんだと想像しています。彼岸のどこかで二人は出会い、話に打ち興じ、此岸の我々をコケにしてるかも。

合掌

ボケさんの思い出、そしてボケさんからのメッセージ

山岸久雄

私がボケさんというお名前を知ったのは、たしか、テントの名称からではないだろうか。京大山岳部に入部した頃、各テントには奇妙な名前が付けられていた。歴代リーダーの呼び名を付けたものだという。その中にネボケという名前があったと記憶している。こんな名前と呼ばれるとは、いったいどんな人なのだろうと思ったが、その人、並河治さんにお目にかかれたのはそれから40数年後、ボケ碁塾に初参加した時であった。

何回目かのボケ碁塾で、ボケさんから「君はマリクを知っているか？」とお尋ねがあった。その頃、ボケさんは胃腸の手術をされたそうで、その執刀医とおしゃべりをする中、彼が京大山岳部員だったことがわかったという。マリクとは、私と同年に入部した佐藤哲也君の呼び名であり、彼の話題でひとしきり話が盛り上がった。昨年、ボケさんが最初に入院した山近記念総合病院の副院長が実はマリクさんであることを知り、彼に連絡をとったところ、いろいろ便宜をはかってくれ、その後の転院もスムーズに進んだとのこと。マリクさんには感謝している。

私はAACK関東会の新年会幹事をしばらく務めていた。ボケさんは電子メールを使わないので手紙で新年会のご案内を差し上げていた。ボケさんはたびたび参加され、長老として開会の挨拶をしてくださった。飄々とした挨拶に会場の雰囲気がなごんでくるのを感じ、幹事としてありがたかった。ボケさんのご自宅がある二宮から都心の新年会会場まではなかなかの距離

であるが、奥様が「皆と会える内に、会っておいたら」と背中を押してくださったとのこと。奥様には感謝申し上げたい。

2022年12月に京大時計台ホールで開催の雲南懇話会（京都フォーラム）のご案内を差し上げたところ、ボケさんよりお手紙が届いた。「プログラムを見た。60年前調査に行ったドルポのことを話す人がいるので、是非それを聞きに行きたい」との趣旨が書かれてあり、ボケさんは京都までお出でになった。私はドルポの講演をされる稲葉さんとボケさんに、是非、親しく語り合っていただこうと思い、開会前のひと時、お二人に会ってもらった。60年の時を隔てたドルポの今昔を語り合うお二人の姿は祖父と孫娘のようでもあり、見ていて嬉しくなるものであった。

京都フォーラムにお元気に参加して間もなくボケさんは発症され、リハビリの甲斐無く逝去された。人の世の無常を感じさせられる、まことに残念なことであったが、ボケさんがお元気であった最後の時期に、京都フォーラムを楽しんでいただけたのはありがたいことであった。

昨年の12月8日、ボケさんのご自宅近くの斎場でお別れの会が開かれた。生前、ボケさんご自分のお別れの会をこんな形にして欲しいとのメモを残されたそうで、その望まれた通りのお別れの会を開く事ができた、とご遺族からご挨拶があった。会場に飾られたボケさんの遺影は、ライフワークとされた花々に囲まれ、満

足そうであった。AACK 関東会、笹ヶ峰会からの参加者を代表して谷口朗さんがお別れの言葉を述べ、参加者全員による献花の後、伊藤寿男さんのリードで、山の仲間が Guten Kameraden と「原始林」をしめやかに歌わせていただいた。

お別れの会の締めくくりは、ボケさんご本人が生前に用意された会葬御礼のご挨拶であった（ご長女の品川香さんが代読）。このご挨拶は、ボケさんが、ゆかりのあるすべての方々へ贈りたいメッセージと思われ、ご遺族の了解を得て、ここに紹介させていただきます。

<会葬御礼>

本日は私の葬儀にご出席下さいましてまことに有難うございます。数百億年前に生まれて来たと考えられる大宇宙、その中のケシ粒より小さい太陽系、その中でうごめいている地球に生まれ、何百億の生き物のひとつとして生をうけました。永遠に生きることは私の DNA がゆるしません。男性としては長命のほうでしょう。

振り返って私のことを考えると、平凡で楽しい人生だったと思います。仕事の上では花の技術研究者、植物の分布や文化に関する知識、いづれも 3 流、好きな遊びで熱中した山登りや暮や料理も 3 流、多くの 3 流をつなぎ合わせてなんとか人並に近い人生を送れたと思います。その間、数多くの私よりすぐれた友人に支えられました。感謝感謝です。大酒のみで少々人より優れた私を、60 年も共に生きて支えてくれ

た友人の 1 人である、世に妻と云われた女性には、どんな感謝の言葉を述べてもたりません。お陰でこの年まで生きられました。

私は仏教、神道、キリスト教、イスラム教などいずれの宗教にも文化的な存在や信仰心を否定しませんが、信ずることもありません。人がえらいのではなく、地上を這い回る虫やトカゲなど、すべての生き物に存在の価値があり、その命はすべて平等であるということです。死に当たり私の遺言を残します。地球の温暖化をできるだけおさえ、私より後に生まれた人、すべての動物、植物が共に生きることを望みます。

並河治



花に囲まれた遺影（2022 年 12 月 8 日）

探検の世界へのお導きをありがとうございました

稲葉 香

私が初めて並河氏にお会いしたのは、2021 年 12 月に京都大学百周年時計台記念館で開催された第 54 回雲南懇話会「京都フォーラム」だった。そこで、私は『西ネパールの辺境に魅せられて～河口慧海師の足跡、フムラ・ドルポ越冬～』という演題で発表させて頂いた。その会場で、雲南懇話会幹事の前田栄三氏が並河氏とお話ができるように、今回の講演会前に紹介をしてくださり、並河氏から春頃にお手紙を頂いていた。そのとき私はとても感激したのだが、まさかご本人と直接お話ができる機会に恵まれるとは想像もしておらず、とても嬉しかった。

私は西ネパールに魅せられて、2007 年から通い続けている。現地の情報は非常に少なく、情報を求めて調べているうちに、並河氏存在を知った。最初のきっかけは、今は亡き師匠、故・大西保氏のブログによくその名を目にしたことだ。それは、1958 年の西北ネパール学術探検隊の記録だった。さらに、詳しく知りたくて本を探し、故・川喜田二郎氏の『ネパール王国探検記～日本人世界の屋根を行く～』や、川喜田氏、故・高山龍三氏の共著『ヒマラヤ秘境に生きる人々』と出会った。並河氏は、この川喜田二郎隊の隊員で、学術・登山の分野で活躍

しておられ、さらに、日本山岳会の機関誌「山岳」第54年（1960年3月20日発行）を見つけた。私は1973年生まれなので、自分が生まれる以前の時代の記録にとってもワクワクした。特に気になった箇所は、コピーして実際に遠征の際に持っていき、記録と現地の今の様子を比べて楽しんでいた。そんな中で特に興味深かったことをあげてみる。

並河氏はカンジロバ・ヒマールに登るためのアプローチのルートを探った。それは、2つのルートがあり、ドルポ地方からムグの村へと横断する縦走路でもある。当初狙っていたのは、ランゲーコーラを遡上するルートだ。しかし、それは日本を出発する前からすでに予想していたように、ゴルジュの連続で現場でやはり、想像以上に厳しいとなった。しかし、「やるだけのことはやってみないと面白くない」と記載している。行けるところまで行ったあげく、やはりゴルジュの突破と渡渉の連続には苦しめられ、拠点地ドルポの最奥の村ポパーまで引き返した。そして、そこから再度情報収集し、「行くだけは行ってみよう」と北回りの山越えのルートに行く。この時、並河氏は、その記述通り行ける限界まで進み、5130mの雪の峠を越え、植物調査を敢行し、連なる五葉松とダケカンバの大森林帯を発見した。

私は、2009年に大西保氏隊で、この北回りの道を並河氏とは逆になるが、ムグからドルポへと横断したことがある。その際に、並河氏が

引き返したであろう峠に立った。約50年前、今も当時と変わらない景色が広がっているのだろうと思いとても感慨深かった。この遠征とルートは、私にとってヒマラヤ横断の面白さを学ぶことができた忘れられないルートになっている。

その後、2012年からは個人で自ら西ネパールの遠征を計画し、現地へ通っている。現地でも多くの写真を撮影するが、その場では山の名前がわからないことが多い。それで山の写真は特にしっかり撮影し、帰国してから調べることにしている。2016年の遠征でのドルポ横断中、並河氏が登ったムクトヒマールが見えるであろう峠、ムー・ラ（峠）を私はルートに入れていた。天気は抜群だったが、肝心の山がどれかわからなかった。そのことがずっと気になっていたところ、ご本人に聞けるチャンスが到来したのが、京都フォーラムだった。私が、「ムクトヒマールが見たくてムー・ラ（峠）に行ったのに、見えませんでした」と伝えると、「そこからは見えないよ」と、当時の体験談を聞かせて下さった。それから約1年後の2022年12月3日、私が極西ネパールのトレッキングから帰国した日、並河氏が天国へ旅立たれたというメールが入った。もう一度お会いして話が聞きたいと思っていたので、とても悲しかった。その場ですぐ黙祷し「探検の世界を教えてください、ありがとうございます」と伝えて、ご冥福をお祈りさせていただいた。

追悼特集世話人からの感謝と御礼

谷口 朗

悲しみも癒えぬ中、快くご執筆頂いた酒井芽様、滑落事故の後遺症で痺れと戦いながら、ご自筆の原稿をFAXで送って頂いた斎藤Yさん、本当にありがとうございました。不思議なご縁でご投稿頂いた佐々木隆造様、西北ネパールで繋がった稲葉香様、この特集に素晴らしい花を添えて頂きました。

全ての皆さまが喜んでご寄稿頂き、中身の濃い追悼集となりました。心から感謝申し上げます。

最後に原稿の整理など一切を引き受けて頂いた共同世話人の山岸ゲリラさん、この特集に関

し格別のご理解と配慮を頂いた横山編集長にも改めてお礼申し上げます。

そして並河ボケさん、本当にありがとうございました。

最後の最後に、20年ほど前に並河家で頂いた献立が出てきました。浜田港は鳥根県浜田市、奥様の故郷です。皆さまにもご堪能頂きたいと存じます。

筑前煮もどき

カボチャ クリームポタージュ

アユのフリッター南蛮風

ローストビーフ

◎ のどぐろの煮付け

◎ 大鯛の塩焼き

◎ アオリイカのウニ合せ

◎ レンコ鯛の中華風あんかけ

◎ 近海マグロと野菜の炒め物 近海マグロのたたき
サラダ

◎ ズワイガニ入りパエリア

リンゴの赤ワイン煮

御飲物（用意したもの）

ビール、酒、ショウチュー、ウイスキー

上高地の JAC 山研へどうぞ

斎藤清明

日本山岳会（JAC）の会員向けの宿泊施設である上高地山岳研究所（通称サンケン：山研）について、管理人をつとめている山田和人さん（ポール、KUAC1979年入部）が、「上高地の三季」と題して、Newsletterの100号（2022年2月）で紹介しています。

その後、同年8月にAACKはJACの団体会員になりました（紹介者は山田、斎藤惇生さん）。かってAACKが文部省の認可を受けて社団法人化したとき（1960年）、法人組織の山岳団体はJACに次ぐものでした（AACK50年史『ヒマラヤへの道』1988でも触れました）。いまは法人のしくみがかわって、JACは公益社団法人、AACKは一般社団法人です。

さて、団体会員ということで、JAC会員ではないAACK会員でも、山研という山小屋を利用できるようになりました。一泊3000円（平日2000円）の利用料で。

さっそく9月末、岳沢の紅葉を見ようと連れ合いと上高地に出かけ、山研を利用しました。

まず、JACの「さんけんブログ」で予約・申し込み方法を確認し、電話で直接山研に申し込みました。

山研の場所は、上高地のバスターミナルから河童橋を渡って5分ほどの便利なところにあります。ホテルや食堂、土産物店などのざわめきを離れ、林のなかの静かな環境です。

外見は、笹ヶ峰ヒュッテより少し大きくした感じ。2階建て・地下1階（浴室あり）。2階が寝室で、布団など寝具が備わっています。食事は自炊ですが、ご飯とみそ汁は提供してもらえる（350円）。ついでに缶ビールは350円。

翌日は予約で詰まっていたので、近くにある



山研 2022.9.28

日本山岳ガイド協会（公益社団法人）の「アルプス山荘」をポールさんに紹介してもらいました（1泊2食13500円）。

上高地は、いつもバスを乗り降りして通りすぎるだけでしたが、今回は岳沢（紅葉には少し早すぎたが）や明神池などを巡って、ゆったりと過ごすことができました。

上高地では4月27日に開山祭があり、山研も小屋明けするとのこと。5月下旬には花々が咲き始め、6月には花盛りだそうです。そうして、閉山祭（11月15日）のころに小屋閉めとなります。

編集者注

「さんけんブログ」には「山研」について詳しい情報が載っています。「さんけんブログ」でネット検索すればすぐに出てきます。また、「日本山岳会」ホームページでメニューから「上高地山岳研究所」を選ぶと「さんけんブログ」のページに飛びます。

「予約状況・予約方法」ではカレンダーで予約の空き状況や休館日をすぐに確認出来る便利です。電話またはFAXでの申し込みに加え、メールアドレスが記載してあり、メールでの申し込みもできるそうです。

堀 了平さん追悼文寄稿のお願い

2023年2月2日、たいへん残念なことに、当会元会長、堀 了平さんが逝去されました。堀さんは1987年から1993年まで会長を務められ、また、1985年には隊長として京都大学山岳部のブータンヒマラヤ学術登山隊を率い、マサ・コン峰初登頂に成功されました。

つきましてはご縁の深い皆様からの追悼文をAACK Newsletterに掲載したいと思っておりますので、ご寄稿をよろしくお願い申し上げます。

横山宏太郎（ブータンヒマラヤ学術登山隊）

記

・掲載紙：AACK Newsletter 第106号（2023

年8月発行予定）

- ・原稿分量：任意（A4版1枚弱が、Newsletter刷上がり1頁です）
- ・原稿体裁：任意（ワープロ文書ファイル、原稿用紙でもOKです）
- ・写真：画像ファイル、または紙焼き写真（紙焼き写真は編集終了後、お返しします）
- ・投稿締切：2023年7月31日（締切にとらわれず、早めのご投稿をお願いします）
- ・原稿送付先：編集人 横山宏太郎
電子メール：
郵送の場合：

会員動向

訃報

堀 了平 2023年2月2日逝去
潮崎安弘 2023年3月21日逝去

事務局だより

京都大学学士山岳会 2023年度総会開催報告

2023年度一般社団法人京都大学学士山岳会総会が開催されましたので概略を報告いたします。

日時：2023年5月27日（土）13:00～17:00
場所：京都大学楽友会館

今年度の総会は、以下の通り、笹ヶ峰会総会等と合同で、会場対面とオンライン併用で開催

されました。

対面出席者はAACK会員、笹ヶ峰会会員、現役学生を合わせて30名を超えました。

AACK総会は対面出席22名、オンライン出席6名、委任状による出席69名、合計97名で、定足数を満たし、無事成立、開催されました。ご協力ありがとうございました。

1. AACK総会 13:00～14:00
2. ヒュッテ管理運営委員会報告 14:00～14:15
3. 笹ヶ峰会総会 14:15～14:45
休憩 14:45～15:00
4. 講演会（渡邊興亜・北大山の会会長） 15:00～16:00
5. 懇親会 16:00～17:00
（京大山岳部報告会 16:00～16:30）

AACK総会の内容 議題

1. 2022年度事業報告・決算について
2. 2023年度事業計画・予算について
3. 役員改選について
4. 新入会員について

報告

1. 雲南懇話会活動概要について
2. AACKアーカイブスについて
3. 梅里雪山33回忌報告
4. 梅里雪山隊の捜索について

総会開催に先立ち、ご逝去の連絡を2022年度中にいただいた12名のAACKと笹ヶ峰会の会員の方々に黙祷を捧げました。ここに改めてご冥福をお祈りいたします。

議題1および議題2の2022年度事業報告、2023年度事業計画については若干の文言の修正の後承認されました。同じく決算、予算につきましては原案通り承認されました。また、議題3の役員改選につきましても原案通り承認されました。議題4については新入会員なしでした。

講演会は、北大山の会会長・渡邊興亜（わたなべ おきつぐ）氏から、「北大山岳部と北大山の会—これまでとこれから」と題した講演を

いただきました。

講演会終了後に、KUAC報告会と併せて、簡単な飲み物とおつまみで、KUAC・笹ヶ峰会・AACK合同の懇親会を開催しました。その後、場所を移して渡邊氏を囲む会を開き、講演の内容をふまえて、AACKや山岳部のあり方についての意見交換を行いました。

なお、2022年度事業報告・決算、2023年度事業計画・予算、新役員名簿は、AACKホームページにて公開いたします。

来年度の総会は2024年5月25日（土）開催を予定しています。

事務局

編集後記

今年の総会、私は久しぶりに対面で出席しました。当日京都駅で、まずは駅前のごみ（賑わい？）にびっくり、市バスの乗車待ちの長い列にまたびっくりでした。昨年11月はまだこれほどではなかったように思うのですが。新型コロナ禍ごく初期の京都で、市バスはガラガラ、道路もガラガラで、驚いたことには、東大路を走る市バスが停留所で時間調整のためしばらく停まっていたことがありました。パンデミックの再来はご免ですが、あんな経験はもうできないだろうと思うと残念でもあります。

京都市はオーバーツーリズム対策をいろいろ講じているそうですから、効果が現れることを願っています。

横山宏太郎

次号原稿締め切り 2023年7月31日

原稿送り先：横山宏太郎

発行日	2023年6月30日
発行者	京都大学学士山岳会 会長 幸島司郎
発行所	〒606-8501 京都市左京区吉田本町（総合研究2号館4階） 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究 研究科 竹田晋也 気付
編集人	横山宏太郎
製作	京都市北区小山西花池町1-8 （株）土倉事務所